

高山の文化を高めた人々 62

真面目に生きた男 達頂さん

小野ヶ原 達治

小鳥 幸男



在りし日の達頂さん

良い。ようあん
なでかい絵を描
いたわ」であつ
た。本人には誠
に申し訳ない
が、野原の真ん
中にボール紙で
切り貼ったよう

小野ヶ原達治さんの事は、「小野ヶ原さん」と呼ぶより、俳号の「達頂さん」と呼んだ方が親しみ深い。

達頂さんを初めて知ったのは、戦後間もない頃、既に私の勤めていた高山市役所へ入ってきからであった。達頂さんが、山口利男さんの伝手を頼って市役所に勤務するようになったのは、山口さんの言を借りると「あいつあ真面目なもんで、国鉄の組合運動の尻について廻っているうちに、レッド・パージに引っかけって首になった。」であつ

た。

達頂さんをよく知るようになるのは、山口さんや空町出身の十人位のメンバーで組織した俳句会「不もと社」に「君も空町にいくらか関係有るんで、一緒に入らんか」と、分かったような分からんような理由で参加してからである。

その顔ぶれの中の何人かが、大野林火先生主宰の俳誌『浜』に参加していた関係で、私は大野先生に師事し、その後の俳句人生に決定的影響を受けることになった。達頂さんも、その良き仲間の一人であつた。

達頂さんが絵の道を志したのは、確か昭和二十年代の後半、初めて「市展」へ出品したのに始まる。当時公民館と呼んでいた、城山の飛驒護国神社下に有った元公会堂（現城山保育園）で初めての市展が開かれ、それに題名迄は記憶にないが、三福寺辺りの牛を描いた水彩画を出品した。

これも山口さんの言を借りると「達頂はなかなか度胸が

な牛の写生であつて、まるで芝居の書き割りに出てきそうな、小学生でも描けるような稚拙なものであつた。

しばらくして、句会の当番が達頂さん宅だったとき、「今こんな絵を描いている」と言

って、洪草焼の窯場の景色を描いたと思われ一枚の絵を見せてくれた。即座に、大変失礼ではあつたが「構図がえがんでおるのではないか」と言うのと、「そうか、お前もそう思うか。守洞春さんもそう言わはつた」と返された。それで守洞春先生に付いて勉強していることが分かつた。

それ以後の達頂さんの精進ぶりは、目を見張るものがあり、やがて日展入選を目指すようになる。爾後版画へ転向して自らの作品を「版画」と呼び、一家言を持つ立派な作

家となつた。

その作品は、あくまでも真面目に銜ず、その人柄を見る佳作を多く残した。その功績は大きく、とかく名を欲しがらばかりの世界にあつて、泰然自若として我が道を行く達頂さんの生き様に、教えられる所が多々ある今日この頃である。

平成十九年死去、享年八十三歳。

（経歴）

- ・ 東光会会員
- ・ 中日展 平成四年入選
- ・ 高山市市展運営委員
- ・ 岐阜県美術展委嘱作家（事務局付記）

小野ヶ原達治さんは、平成十五年度まで文化協会役員を務められ、当協会の様々な活動にご尽力いただきました。



小野ヶ原さんの版画（飛驒文藝の表紙に掲載）



若かりし達頂さんと私（伊豆大島にて）